

第2章 銃後

よこはま
横浜大空襲

悲惨な空襲を生き延びて

すみよし
住吉シズさんのお話から

○援農 日本全国で12歳から15歳の男子中学生や女子学生らが働き手の男性が戦場に行つて手薄になつた農村に働きに行つたこと。

○軍事教練 軍隊で行う戦闘のための訓練。

○軍需工場 軍隊が必要とするものを作る工場。主に武器やその材料などを生産する。

私は、小清水町で小学校六年生ぐらいまで普通に過ごしましたが、その後、出征した兵隊の留守家族のところに援農に行くようになりました。みんな援農に行ったので授業もなく、昭和十七（一九四二）年ぐらいからは授業がほとんどない状態でした。

援農に行くのは毎日大変でした。二時間も三時間も山奥へ歩いて行って、やっと着いたと思つたらお昼という毎日です。それが十二、三歳のころでした。

畑仕事はしたことはありませんでしたが、働き手はみんな兵隊に行つてしまつたから手が足りなかつたので麦刈りなどの手伝いをしました。食料が大事な時代でしたから、農家に行かないときは学校の菜園でも作業をしました。農地にできる土地は全て耕しました。

戦争がはげしくなると、毎日のように兵隊さんの出発があつたので見送りをしました。そして、見送つたと思うと今度は遺骨が返つてきました。また、軍事教練があつたり、冬にはなぎなたの練習をしたりしました。

十四歳のときに、軍需工場の動員に行くことになりました。学校ごとに男女五人ずつ割り当てがあつて、行きたい人を募集するのです。割り当て通りにしなかつたら、非国民と言われました。

私が軍需工場に行くことに親は反対しました。そのころは、東京空襲が始まつていて津軽海峡を渡れるか渡れないか分からない時代でしたから、もう二度と帰つてこれないかもしれないからと泣いて止めたのです。

○B 29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万メートルの高高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島、長崎への原爆投下にも使われた。

○赤紙 人を軍隊に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

動員に行く子どもは、全道各地から道庁に集まり、今の赤れんがの講堂が、座る場所もないくらいびっしりになるほどでした。みんな中学生くらいねんれいの年齢です。そこから、それぞれが全国各地の軍需工場ぐんじゆに出発し、私は横浜よこはまの軍需工場に行くことになりました。私が行った工場は造船所ぞうせんじよで、船のタービンなどの動力機械の図面をつくっていました。図面は書けなかったので、実際には図面の整理をしていました。

大人は兵隊に行っていたので、工場に大人はほとんどいなくて、学生ばかりでした。大学生もいっぱい来ていましたが、二十歳はたちになったら赤紙が来て工場から兵隊に行きました。

そのうち、空襲が激はげしくなり、横浜よこはまの元町へ避難ひすることになりました。そうして、五月の横浜空襲を迎むかえました。

空襲は、街が見渡せる丘おかの上から見ました。丘と言ってもそんなに高くなって、ほんの百メートルもないくらいの場所です。空襲があったのは天気のいい日の昼間でしたが、空襲の最中は煙けむりがひどくて何も見えませんでした。空襲警報が鳴った瞬間しゆんかんには、空が見えないほど一面にB 29が飛んで来ていたので、避難ひなんする間もなかったと思います。



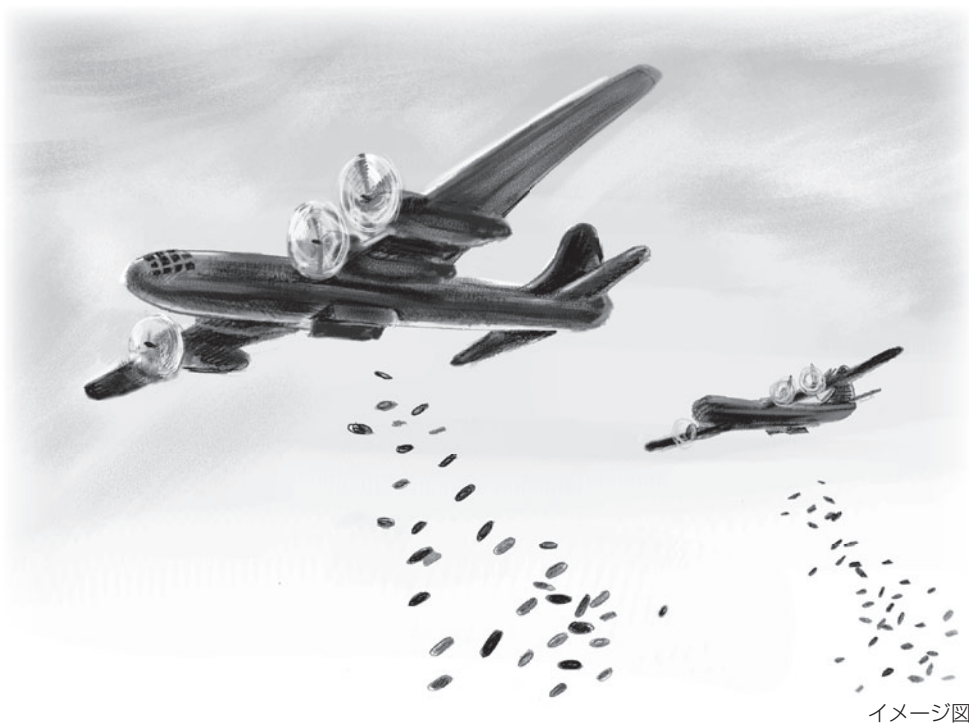
イメージ図

援農に向かう子供たち

日本には、迎撃つ飛行機もないし、下から撃つ弾もありませんでした。爆弾を積んだ飛行機のお腹が開いて、ボタンを押したらすぐに落ちるようになっていたのです。丘の上の周り全部に、これでもか、これでもかというほど爆弾が落とされました。きれいに並んだ三〜五列の爆弾が飛行機から出ると同時に破裂し、中からまた小さな爆弾が出てくるのです。その爆弾が油性で、人間は油をかぶって、火に覆われたのではないでしょう。一面が黒い煙で真っ暗になり、あるところはオレンジ色の炎があがっています。爆音もすぐて人の声も聞こえないほどでした。

空襲の後、丘から街を見ると、見渡す限り何もありませんでした。わずか三時間ぐらいのことだったと思いますが、人は一人も見えず、生きているもの、動いているものは何も見えませんでした。

空襲が終わると同時にB29はいなくなりましたが、空襲警報解除のサイレンは鳴りませんでした。それを鳴らす人もいなかったのだと思います。わたしは、空襲が終わったのを見計らって丘を降りました。そうすると、運河が人で埋まっていました。炎に追われて、爆弾に追われ



イメージ図

B29の爆撃

て逃げ場を失った人たちの遺体が折り重なっていたのです。本当に生々しい光景でした。

工場の寮に帰るためには焼け野原を横切っていかなければなりませんでした。燃えたばかりだから、もう熱いどころではないのです。札幌駅と新札幌駅ぐらいの距離を、水でぬらしたタオル一枚で熱さをしのぎながら、女の子二人と男の子二人で帰りました。帰る途中には逃げ遅れた人の遺体のごろごろとありました。真っ黒く炭のようになってお母さんが、赤ちゃんを抱いている姿、男か女か分からないような真っ黒な遺体がたくさんありました。足を上げて転んだままの人や自転車に乗ったままの姿もありました。空襲警報も間に合わず、逃げる暇な

んかなかったのだらうと思います。子どものもので、げたを履いて歩いていたので、私たちが寮に着いたのは、夕暮れでした。交通網も連絡手段もないので、寮では私たちはもう死んでいるという情報が入っていたようです。

終戦になると、工場の寮は進駐軍に没収されました。私たちは、終戦になった次の日に、着の身着のまま、帰されました。壊れるくらいぎゅうぎゅうの網走行き汽車に乘せられて、北海道に帰ってきました。

もし、私が生きている間に戦争が起きて孫が戦地に行ったら、私は切なくて生きていられないだろうと思います。

終戦になって日本は平和を取りもしましたが、今の平和は多くの犠牲があつて成り立っているということを絶対に忘れてはいけないのです。

DATA

平成22年度厚別区平和事業
聞き取り

- ・平成22年4月14日
- ・厚別区役所



住吉シズ(すみよし・しず)さん

- ・昭和5(1930)年生まれ
- ・札幌市厚別区在住